

減少し始めた韓国人のアメリカ留学

——『高等教育クロニクル』の記事より——

宮 田 実 (訳)

South Korea Is Sending Fewer Students to U.S.

—— An Article from *The Chronicle of Higher Education* ——

Translated by MIYATA Minoru

韓国人と外国留学

毎年秋になると東アジアのある国から何万人という学生がアメリカの大学へやってくる。その国では教育が成功への鍵と考えられ、親たちは子供を外国留学させるために貯蓄する。彼らは高校の授業料に加えて学習塾や英語学校の費用、アメリカの大学への入学をあっせんする業者への費用も工面しなければならない。かつてはごく少数のエリートのものであった外国留学が今では多くの新興中流階級の子弟が目指すものになっている。この国とはどこか？中国だと思った人も多いかもしいが、実は韓国である。

5年程前までアメリカの大学への韓国人留学生数は毎年2ケタの伸びを記録していた。しかし、まず大学院への留学生が減少し始め、昨年は学部への留学生も減少したのである。2008年には7万5千人あまりいた留学生が2012年には約7万人に減少した。

このような傾向はアメリカの大学への留学生数が世界第3位の韓国にとってはやや心配なことである。一方、アメリカの大学にとっては明らかに一種の警告であると言えよう。23万人を超える中国人留学生に大いに依存しているアメリカの大学に対して、その数が増え続けると思っはいけないという警告でもある。

中国と韓国は政治形態、人口、経済体制などで異なっているが、教育についての考えに

平成26年11月3日 原稿受理

大阪産業大学 教養部

は共通点があり、両国とも外国留学には積極的である。ソウルで教育コンサルタントをしているウー氏は「中国の教育市場は10年前の韓国によく似ています」と言う。

両国にはもう一つ共通点がある。韓国ではかつては経済的な成功を保証すると考えられていた外国留学がもはやそうではないのではないかという不安が広まっている。同じように中国人も最近、高価な外国の学位の効果に対して不安を感じ始めている。外国留学を冷静に見始めている韓国の動きが中国のアメリカ留学が頂点に達した時にある種の警告になるのだろうか？

アメリカを目指す理由

優秀な学生を外国に送り出すことは長年にわたって、韓国や中国にとって実利的な選択であった。特に自国の大学院レベルの教育能力不足を認識しての選択であった。しかし、両国の経済情勢や教育システムが変化するにつれて外国留学の理由が変化してきた。

韓国では1990年代から、中国では10年前から富裕層が台頭し、それと共にアメリカへの留学生が増加した。韓国でも中国でも親は子供がアメリカの大学で学位を取れば、ますますグローバル化し厳しくなる就職戦線に打ち勝てるだろうと信じた。実際、多くの韓国企業は新入社員に対して高い英語運用能力を求めている。

外国留学を目指すもう一つの理由として国内の厳しい受験競争が挙げられる。中国では *gaokao* (高考) と呼ばれる国立大学入学試験、韓国では *suneung* (大学修学能力試験) と呼ばれる試験の成績によって入学できる大学が決まる。このような事情もあってかこれら2つの国では大学院ではなく学部への留学が増えている。アメリカの国際教育研究所の調査によれば、アメリカの大学へ留学する韓国人の3分の2が学部レベルに入学する。また、この10年間で中国人のアメリカの大学学部への留学生は約9倍になった。

アメリカ以外の選択肢

韓国では大学生の外国留学の人気の陰りが見え始めている。昨年(2013年)約24万人が外国留学をした。これは韓国の大学生全体の約7%にあたる。そして24万人の内、約3分の1はアメリカに留学している。このように外国留学する学生の比率が高い韓国であるが、最近では外国で得た学位の有効性が弱まっているように思われる。韓国のフルブライト委員会の教育アドバイザーであるフローレス氏は「韓国ではおそらくアメリカ留学の斬新さが薄らいできていると思います」と言う。

一方、中国では外国留学する大学生の割合は韓国に比べるとかなり低いが、アメリカへの全留学生の3分の1は中国人である。中国人向けにアメリカの大学留学の手引書を執筆

したドットソン氏は広東省の深圳市で留学アドバイザーをしている。彼によれば、中国人留学生を数多く受け入れているアメリカのいくつかの大学では次のようなジョークが生まれていると言う。「中国語をマスターしたかったらうちの大学に来なさい。北京からのクラスメイトがたくさんいるから。」これはジョークであり、同時に現実的な問題でもある。

もしアメリカのエリート大学が中国人学生の受け入れを厳しく制限すれば、たとえ学業成績が優秀で英語のスコアも高い学生でもそのような大学への留学を躊躇するかもしれない。例えば今年、深圳市でトップの高校の約150人の学生がアメリカの一握りのエリート大学の入学許可を目指して熾烈な競争をした。この150人というのはハーバード大学の新入留学生の総数に相当する。アメリカのエリート大学への門戸が狭められるとドットソン氏が指導する学生たちはアメリカ以外のエリート大学を目指すようになる。例えば、香港大学、カナダのトロント大学、シンガポールのエール・NUS（シンガポール国立大学）カレッジなどである。ドットソン氏は来年以降彼が指導する高校生たちはアメリカの大学を敬遠するのではないかと危惧する。彼らはアメリカのエリート大学が極めて難関であることをよく知っているのである。

留学生と人脈

中韓両国では大学受験が厳しいが、同時に卒業生の就職も厳しいものがある。韓国では経済情勢が不安定で大卒の就職率が60%まで下がった。四年制大学よりも実学を学ぶ専門大学の卒業生の方が就職率は良い。中国では人数がけた違いに多いが、中国社会科学アカデミーによれば、毎年7百万人の大卒が生まれ出されるが、2013年の卒業生で見れば失業率は約18%である。両国では厳しい就職状況の中でかつては外国の学位を持っていればかなり有利だと考えられていたが、今では状況は変わってきている。事実、外国の学位が就職の妨げになることさえあるとも言われる。

ソウル郊外にあるニューヨーク州立大学韓国校入学部のチェ部長は「留学を終えて韓国へ戻ってくる学生は、就職の際に重要な人脈が足りないことに気付くのです」と言う。アメリカの大学の就職部では留学生に出身国へ帰って就職するよう促す傾向がある。チェ氏は次のように述べる。「韓国では人間関係がとても重要なのです。就職するためには大学内に良好なネットワークを築かなければなりません。しかし、アメリカに留学した人にはそれが無いのです。」

アメリカへの中国人留学生が急増した頃の学生たちが今、中国に帰国し始めている。しかし、それより以前に帰国した留学生についての調査結果によれば、留学した彼らより中国に残った人の方がより成功している。この調査を実施したシンガポール国立大学のスン

氏はアメリカへの留学経験者が社会でうまくいっていない理由として適材適所がうまくいっていないことと社会的ネットワークの不足を挙げている。昨年あるリクルート会社が実施した調査によれば、中国企業の70%は外国留学経験者を優先採用しないと答えている。また、約10%の企業は彼らを採用したくないと答えた。

中国では外国で学んだり働いたりした後、帰国した人のことを「ウミガメ」と呼ぶ。即ち、片方の足は自国にあるがもう一方の足は外国にあるという意味である。しかし、最近では外国留学する人は「海苔」と呼ばれる。即ち、二つの国と文化の間を漂い、どちらの国にも落ち着くことができないという意味である。

動じないアメリカの大学

もちろん外国留学の人気に陰りが出てきた理由のすべてがネガティブなものではないが、一つ重要な要素がある。それは、かつては海外でしか得られなかった教育機会が国内でも得られるようになったことである。韓国政府は学校での英語による教育の充実を要請している。それを受けて韓国内の多くの大学では英語による授業が実施されている。また、中韓両国ともに海外の大学との連携を強化している。前掲のチェ氏が勤務するニューヨーク州立大学韓国校ではわざわざアメリカに行かなくてもアメリカの学位を取得することができる。また、中韓両国は学生の相互交流を推進し、学生がアジアに居ながら国際交流を経験できる機会を増やしている。

中韓両国とも国内の一流の研究機関や世界的に有名な研究者に多額の研究費を与えたりして研究に巨額の投資をしている。このような投資とアメリカの大学院への留学生の減少は無関係ではないように思われる。2010年以來アメリカにおける韓国人の大学院生の数は減少している。大学院評議会の最近の報告によれば、中国からのアメリカの大学院への志願者数は2年連続で減少している。高麗大学高等教育政策研究所のヨン氏は「韓国の大学はこれまで長期間にわたって外国での学位取得者を教授陣に迎える傾向がありましたが、今は変わりつつあります。特に理系の優秀な学生は大学院を選ぶ時、韓国かアメリカかどちらにすべきかを真剣に考えます」と言う。

外国留学の動向には個人ではどうすることもできないことが影響している。例えば、最近の韓国経済は低迷している。また、韓国の出生率は世界で最も低い水準である。来年までには大学の収容数が大学進学者数を超えるかもしれない。一方中国では政府の一人っ子政策のため2030年には20～24歳の人口が2010年に比べると60%減少すると予想されている。

アメリカの大学にとって韓国や中国の状況が変化しても差し迫った問題にはならないか

もしれない。韓国からの留学生が減少してもその分中国やその他の国々からの留学生で埋め合わせることができる。アメリカの大学関係者は当分の間、中国人留学生数が大幅に減少することはないと見ている。彼らは留学を希望する中国人学生を母国に留まらせるような大学は中国にはまだまだ少なく、外国留学の準備のための学校はまだまだ拡張するだろうと考える。

韓国の啓明大学教育学部のガザリアン教授は、中国にも韓国にもアメリカ留学への潜在的な需要があるだろうと推測する。彼の調査によれば、実際にアメリカに留学した学生数より多くの学生がアメリカを留学の第一候補地として挙げている。

韓国が5、6年前に享受した経済成長が近い将来再び起こると考える人は極めて少ない。多くの人が注目するのはアメリカへの中国人留学生数が頭打ちになるかどうかではなく、それがいつ起こるかである。前ヴァージニア大学留学生部長のミューズ氏は次のように述べる。「韓国で起きたことは中国でも起こるでしょう。終わりが近いということではなく、将来何かが変わるということです。」

(2014年5月23日号)

(Used with permission of The Chronicle of Higher Education Copyright© 2014. All rights reserved.)

訳者あとがき

本稿はアメリカで発行されている高等教育に関する週刊専門新聞『高等教育クロニクル』に掲載された記事の翻訳である。筆者はカーリン・フィッシャー氏である。

アメリカは外国人留学生受け入れ国世界ナンバー1である。米国国際教育研究所が発表した国別アメリカ留学生数によれば2013/14年度、1位は中国で27.4万人、2位はインドで10.3万人、3位は韓国で7.1万人と続き、中国のみで全留学生の約3割を占め、上位3か国の合計は全体の約5割を占める。前年度に比べると中国は16.5%増えている。

韓国人のアメリカ留学は2008年をピークに漸減している。本稿では様々な理由が述べられているが、果たしてこの傾向が今後もずっと続くのか、そして、中国も韓国と同じ道を歩むのか注目したい。

日本は1994年から98年にかけてアメリカへの留学生数が4万人を超え、国・地域別でトップであったが、その後減少し続け、2013/14年度は1.9万人あまりで、サウジアラ

ビア、カナダ、台湾に続き7位である。しかし、その減少割合は小さくなってきており、2013/14年度は前年比1.2%減にとどまった。安倍首相とオバマ大統領は2014年4月の首脳会談で、2020年までに日米間の留学生数を倍増させることで合意した。この合意が実現してほしいものである。「内向き」といわれる日本の大学生が、今後ますますグローバルが進む世界でたくましく生きていくために、積極的に外国へ出て見聞を広めてほしいと願う。